

494 動注化学療法実施中の骨盤内臓器悪性腫瘍患者におけるリザーバシンチグラムの臨床的評価 藤本肇（沼津市立・放）

リザーバ留置下動注化学療法実施中の骨盤内臓器悪性腫瘍患者 24 例において、リザーバシンチグラムの定量的・視覚的評価を行った。

$^{99m}\text{Tc-MAA}$ を 370MBq 直接動注して得た正面像において、正中線の左右でのカウント数の単純な比を計測した。また、異常な hot spot の出現の有無につき視覚的に評価した。

良好な薬剤分布が達成された 20 例における左右カウント比は平均 0.14 であったのに対し、不良であった 4 例では平均 0.06 であった。異常 hot spot ありと判定した 3 例において、留置したカテーテルの嵌入または異常側副血行路形成に起因する筋壊死等がみられ、これらは他の画像所見にては予測困難であった。

495 唾液腺シンチグラフィによる末梢性顔面神経麻痺の予後判定

山本和香子、秀毛範至、油野民雄（旭川医大放）瀧淳一、中嶋憲一、利波紀久（金沢大核）

未治療の末梢性顔面神経麻痺患者 57 名につき、予後評価の目的で唾液腺シンチグラフィを施行した。顎下腺に ROI を設定して時間放射能曲線を作成し、顎下腺の RI 集積（最大値）の左右比と唾液分泌刺激後の顎下腺からの RI 排泄の患側／健側比が、おのおの 0.8 以上であるものを予後良好と仮定すると RI 排泄の患側／健側比は予後と良好な相関関係にあった。特に麻痺発症後 14 日以内の症例に限定するとさらに予後をよく反映しており、発症後早期の検査が望ましいと考えられた。外科的治療を要する場合は可及的早期に施行した方が治癒率が高いことが知られており、治療法を選択する上で、本検査は簡便かつ有用であると考えられた。